

日韓弥勒説話の比較

——『三国遺事』生義寺石弥勒出現縁起譚を中心に——

小林純子

はじめに

日本における弥勒信仰は、『日本書紀』の敏達天皇十三年（五八四）「秋九月に百濟より来る鹿深臣、弥勒の石像一躯有もり」という記事などをもって、朝鮮半島から伝わったとされている。^①

一方、朝鮮半島由来と思われる弥勒仏は、日本において各所に見られる。例えば、秦河勝が創建した太秦の広隆寺にある半跏像、難波の四天王寺の本尊の半跏像などはいずれも弥勒像であり、新羅仏教の影響がみられると指摘されている。^②

このように仏教学の立場からは、朝鮮半島から仏教が伝わったという前提のもとで、日本の弥勒信仰は朝鮮半島における弥勒信仰と関係があるという見解が一定の地位をえている。しかし説話研究においては、朝鮮、日本と個々に研究が進められてきており両国の弥

勒説話の関係について、あまり具体的には言及されてこなかったのではなからうか。

そこで、著者は日本と韓国の弥勒説話を取り上げ、各説話に見られる弥勒の特徴を捉えた上で比較を行い、両国間の説話における影響関係の有無について見ていくこととする。

一 言葉の定義と資料整理

先行研究において、弥勒に関する研究はどちらかという弥勒信仰を中心になされてきたため、本論においては弥勒の記述はあるが、仏教思想史研究において具体的に言及されてこなかった説話を探り上げることにしたい。よって弥勒にまつわる説話の特徴を広く捉えるため、「弥勒」、弥勒の漢訳とされる「慈氏」、弥勒がいるとされる「兜率天」の語が記されている説話を《弥勒説話》と定義する。

テキストとして韓国側資料は十三世紀初頭に書かれた古文獻『三国遺事』（以下「遺事」と略す）、日本側資料としては弥勒の記述が多く見られる『今昔物語集』（以下「今昔」と略す）を使用する。客観的に説話を比較するため、説話から事項を抽出し、事項レベルでの比較を行うこととする。^④

まず、『遺事』『今昔』から弥勒説話を抽出する。抽出方法は前述したとおり、弥勒にまつわる語が記されているものをすべて取り上げる。同一説話内であっても、別の役割で語られている場合は別にした。取り上げた説話から弥勒の現れ方に注目し分類すると、

A・兜率天に生まれる、もしくは往生することを記述した弥勒上生信仰のもの

B・①弥勒が石仏や仏像として造像・出現するもの

②弥勒そのものが出現するもの

③その他

と、四つに大別できた。^⑤ 分類一覧表は、添付資料に付した。

先行研究において、Aの兜率天往生にまつわる説話は、『今昔』『遺事』ともに経典の記述が元になった説話であると指摘されている。^⑥ しかし、Bにおいてはいずれも弥勒が何を意味しているのかという点について統一した見解が示されていない。よって本論では、B①に分類した弥勒が石仏・弥勒仏として出現する説話『今昔』

からは卷第十一話「聖武天皇、始造元興寺語」、第三十話「天智天皇御子始笠置寺語」、『遺事』からは『遺事』卷第三塔像第四生義寺石弥勒を取り上げ検証していく。

二 説話の比較及び問題点の指摘

問題点を指摘するために各話において同話・類話として指摘されているものと類話比較を行い、各類話間に共通する事項を抽出すると次の通りである。（各話の同話・類話は注⑦⑧において示した。）

『今昔』卷第十一話「聖武天皇、始造元興寺語」^⑦

(I) 元興寺の弥勒の由来の説明。

(II) 天竺の長元王が仏法知るものを求める。

(III) 海に浮かぶ船にのった僧の出現。

(IV) 僧が王に自己紹介する。

(V) 僧が王に最勝王経を説誦。王は仏を造ろうと考える。

(VI) 王が故郷を恋しがる僧を船に乗せ、財を積み帰す。

(今昔独自の記事)

(VII) 船に乗った童子が仏を造りに来る。

(VIII) 童子が九日間かけ弥勒仏を造る。

(IX) 童子が弥勒を造った理由を述べる。

(X) 童子が弥勒のありがたさを説いて消える。

(XI) 長元王が兜率天に生まれたが、その後悪王が出て仏法滅びる。

(XII) 白木（新羅）の国王がこの仏を移すことを相宰に命じる。

荒波の時、龍に助けを求め、見返りにこの仏の眉間の珠を海に入れる。

(XIII) 龍に珠を返してもらおうとし頸を切られる苦を逃れようとする。

(XIV) 相宰が金剛般若を書写すると竜王が珠を返す。

(XV) 竜王は夢で苦を逃れたことを告げる。（今昔独自の記事）

(XVI) 仏に珠をいれて国王に渡し仏法が盛んになる。

眉間の珠の光がなく仏法滅びる。

(XVII) 本朝の元明王がこの仏を奉る。元興寺を建てる。

(XVIII) 荒僧が天竺の元明王の忌日を奉ることに反対する。

(XIX) 他の多くの僧が東大寺に移り元興寺の仏法は廃る。

(XX) 弥勒は化人の造った仏で帰敬すれば兜率天に生まれる。
（今昔独自の記事）

『今昔』卷十一 第三十話「天智天皇御子始笠置寺語」^⑧

(1) 天智天皇の皇子の紹介。

(2) 皇子が獵に出掛け、鹿を追う。

(3) 皇子の乗った馬が崖の上で立ち往生する。

(4) 皇子が馬とともに死にそうになる。

(5) 皇子が弥勒菩薩を刻むかわりに、命を助けてほしいと誓約する。

(6) たちまち馬が後戻りして皇子は助かる。

(7) 皇子は笠を目印にして帰る。

(8) 後日、皇子はその場所を訪れる。

(9) 天人が顕われ、皇子を助けようとする。

(10) あたりが暗闇となり、雲が晴れる。

(11) 皇子は、弥勒菩薩が彫られていることを知る。

(12) 皇子は礼拝して帰る。
（今昔、ノミ）

(13) 笠置寺の名前の由来。
（今昔独自の記事）

(14) 弥勒菩薩を信仰すれば、観音天に生まれることが約束され
るといふ。
（縁起、ナシ）

(15) 良弁による寺の繁栄。
（今昔独自の記事）

『遺事』卷第三塔像第四生義寺石弥勒^⑨

生義寺石弥勒に関連する説話は、『三国遺事』卷第二紀異第二景

徳王忠談師表訓大徳、及び卷第三塔像第四生義寺石弥勒に見られる。

前者は石弥勒を「南山三花嶺弥勒世尊」、後者は「石弥勒」と記しているが、生義寺石弥勒の条で、その石弥勒が「忠談師毎歳三重九烹茶献供者 是此尊也」としていることから、生義寺の石弥勒と

「南山三花嶺弥勒世尊」が同一であることが分かる。本論では生義寺石弥勒の出現の記述を検討するため、巻第三塔像第四生義寺石弥勒の条を中心資料として扱い、巻第二紀異第二景德王忠談師表訓大徳および、実際に出土した石仏の様相は補足的資料として扱う。『今昔』と比較検証するため、便宜上、本説話を事項で記述する。

- (i) 善徳王代、生義という僧が夢を見た。
- (ii) 一人の僧が、生義を促し南山に上り、南洞にたどり着く。
- (iii) その僧は生義に掘り出すことを請願する。
- (iv) 夢から覚めた生義は友人とその場を訪ねる。
- (v) 洞の地を掘ると石弥勒が出てきた。
- (vi) 石弥勒を三花嶺に安置した。
- (vii) 寺を造って住み生義寺と名づけた。

類話比較から取り出した元興寺、笠置寺の説話におけるそれぞれ共通事項を比較し、問題点を指摘すると次の通りである。『今昔』における弥勒仏は、天人や、童子(9)(VII)により「彫られる・造られる」というものである。さらに弥勒を彫顕した天人や、造像した童子は姿を消す(11)(X)。そして『今昔』の独自文ではあるが「彫られる・造られる」した弥勒に帰敬すれば兜率天に往生する(14)(IX)と締めくくる。つまり、天人や童子に造像された弥勒は兜率天往生を請願する対象として捉えられている。しかし「遺事」

における弥勒は、夢により出現の場所の暗示をされ(i)、標をつけた洞が僧・生義に掘られることにより《出現する》(v)というものである。

さらにこの弥勒への誓願の内容は、「遺事」巻第二紀異第二景德王忠談師表訓大徳に記されているが、国家の安寧である。『今昔』と『遺事』の説話の決定的な違いは、弥勒が「彫られる・造られる」と《出現する》ことであり、さらに請願が《兜率天往生》と《国家の安寧》というものである。日本と韓国の弥勒出現説話における弥勒の出現方法および役割はまったくことなつて語られている。この違いは何を意味しているのだろうか。

三 生義寺石弥勒出現縁起譚の解釈

1 先行研究および論点の指摘

『今昔』における二つの説話の論証は後述することとし、まずここでは「遺事」生義寺石弥勒条から検証していく。「遺事」における弥勒説話に関する先行研究は、二大別されてきた。一方は仏教学側からの見解である。一九七三年に八百谷孝保氏が、弥勒經典における分類と同じく、「遺事」における新羅弥勒信仰説話を上生信仰と下生信仰とに大別され「新羅社会における弥勒信仰の主流は『下生経』に基づく」とし、下生信仰の特徴の見られる説話が新羅にお

いては主流であるとした。¹⁰しかしこの論述に対し金煥泰氏は『遺事』から十一の弥勒説話を取り上げ、『三國遺事』に見られる弥勒信仰の痕跡はそのような上・下生信仰は現れておらず、むしろ新しい独特な新羅的信仰思想を示している¹¹とし、經典における信仰形態が新羅において受容されたのではなく、新羅的立場から弥勒經典を受容し新羅化された弥勒信仰として発展し、その特徴が説話に現れているとした。しかし、新羅の受容が何を意味しているのかは明確に記されていない。本説話に関する見解も、仏教学側が主張する弥勒下生信仰が元になった説話であるという見解と、新羅固有の巫覡信仰などの現れであるという二つの見解が主流をなしている。¹²その中で、三品彰英氏は仏像が「出現する」ものとして語られている点に注目し、次のような見解を示されている。

しかるに仏・菩薩の場合は可視的な仏像として見られるのであるが、しかもそれが「出現するもの」として、固有の神靈観に即して語られるのである。(中略)またその所伝の多くは天界から降ったり、海中池中ないしは土中から現れたり、あるいは海の彼方から来着したりするというのが一般的な型であって、いずれも神靈来臨の形式に準じて語られている。¹³

三品氏は、生義寺石弥勒の説話ではなく、『遺事』巻第三興法第三四佛山 掘佛山 萬佛山の四面仏にまつわる説話が、新羅固有の

仏像出現の型であることを指摘され、それが「固有の神靈観に即して語られている」とされた。

そこで著者も、仏教学が主張する經典の記述からの考察ではなく、「固有の神靈観に即して語られている」という三品氏の視点にたち、説話側からテキストの中にえがかれている生義寺石弥勒の「出現すること」が何を意味しているか実証していくこととする。

2 弥勒經典との比較

經典の記述と本説話の弥勒出現の記述に違いがあるか確認をするために、再度生義寺の石弥勒の出現の記述と弥勒三部経における弥勒の出現の記述を比較検討する。

漢訳の弥勒に関する主要經典は秦の鳩摩羅什(三四四～四一三)の漢訳『仏説弥勒下生成仏経』『弥勒大成仏経』沮渠京声漢訳の『観弥勒菩薩上生兜率天経』の三つとされている。¹⁵今回の考察においては、弥勒がこの世に現れることが説かれた説話と比較考察するため、弥勒下生の記述がある『仏説弥勒下生成仏経』『弥勒大成仏経』に説かれる弥勒の出現の場所を見てみる。

爾時彌勒菩薩。於兜率天觀察父母不老不少。便降神下應從右脇生。如我今日右脇生無異。彌勒菩薩亦復如是。¹⁶

弥勒は、兜率天にいる時に両親が老いず少からざる様相を観察し、

神魂を母の右わきに降ろしそこから出現したと記述されている。つまり弥勒は兜率天から来臨したのであり、出現はバラモンの女梵摩波堤の右わきから生まれたのである。

しかし、『遺事』生義寺石弥勒では、「與友人尋所標。至其洞掘地。有石弥勒出。」とあるように、南山の南洞の土の中からの出現であるとされている。だが『遺事』の編者・一然が、弥勒が土の中から出現すると記述していることから、弥勒の出現する兜率天を山の土の中と捉えていたとも考えられるため『遺事』における兜率天の記述から、その位相を見てみたが「莫言兜率天連天遠」¹⁷と記述されており、兜率天は天に連なるところにあると認識されていると考えられる。さらにその天上世界を細分し、「如之乃至餓鬼、修羅、人、人王、天、天王、閻法、出家、值聖僧、生兜率、生淨土。」¹⁸としていることから、兜率天は天に連なる世界であり、弥勒経典に記された世界観と一致している。

つまり、生義寺石弥勒の出現は、経典における弥勒の出現場所である兜率天からの来臨と異なって認識され語られている。さらに『遺事』における他説話に見られる兜率天の位相は経典にえがかれた兜率天の位相と一致しているが、本説話にある「南山の南洞」の位相は異なるため弥勒信仰説話と分類することは難しい。生義寺の石弥勒が土の中から出現すると記述されていることから、弥勒経典

に記述された弥勒とは別の意味で捉えられ語られている説話であるといえよう。

3 出現場所の記述検討

では、生義寺石弥勒が出現したとされる場所は何を意味しているのであろうか。「南山」「南洞」という記述から考察していく。生義寺の石弥勒の出現地であった「南山」は『三国遺事』巻第一紀異第一新羅始祖赫居世王において初見する。

① 南望楊山下蘿井傍、異氣如電光垂地。

② 營宮室於南山西麓。

①に見られる通り、赫居世が出現したとされる山は「楊山」であるとされている。楊山については、蘿井が李朝以来南山の麓に祀られていることから考えて南山と同じであるという見解は先学によって明らかにされている。¹⁹またこの楊山に関する記事は『三国史記』に数カ所見られ、いずれも瑞兆記事か閔兵記事であり神聖な山とみなされていたと指摘されている。²⁰赫居世が祀られた場所としての記述②が、南山の初出であるが、これは①の楊山であり、赫居世が出現した場所と、祀られた場所はいずれも南山であることがわかる。さらに、「又幸鮑石亭。南山神現舞於御前。左右不見。王獨見之。有人現舞於前。」²¹とあり、第四十九代の憲康大王（八七五〜八

八六)が鮑石亭に行った時、南山の山神が現れ王の前で舞をまっただが、その姿は王にだけよくみえたと記されている。南山には山神がいるとされ、その神は国が減びることを予言しに来る。つまり、単なる神ではなく、国家の危機を予言するためにやってくる山神の存在するところが南山であることがわかる。

また朝鮮総督府の資料にも、南山が神聖な山として人々に崇められていたという記述が見られることから、「南山」は古代から新羅において神聖視されてきたことがわかる。

これらの事例から、生義寺石弥勒は神聖な山とされている南山からの出現であることがわかるが、では南洞は何を意味しているのだろうか。もう一度その記述を見てみると、「至其洞掘地。有石弥勒」とある。その洞を掘ることにより出現したとあることから、南は方角を示し南山の南側の洞において石弥勒が出土したことが分かる。同じように、山の土の中から出現する記述として、次の事例を挙げることが出来る。

又景德王遊幸栢栗寺。至山下聞地中有唱佛聲。令掘之。得大石。四面刻四方佛。因創寺。以掘佛為號。²³⁾

三品氏は、この記述を元に、「この仏像出現の状は、四仏山の場合合は新羅や加羅の始祖降臨神話と同じ類型であり、掘仏山の場合合は耽羅島(済州島)の始祖神が聖山下の地中から出現する話と同じ類

型である」とし、ここから始祖神の出現の(山の麓の洞穴から祖神が出現する)という型を指摘された。²⁴⁾つまり、生義寺石弥勒も(南山の南の洞から石弥勒が出現する)という出現であり、両者の出現の型は一致する。生義寺石弥勒の出現が、始祖神と同じ位相で捉えられていたために土の中からの出現と記述されたと考えられるが、生義寺石弥勒の説話における他の表現の特徴からも検証していく。

生義寺石弥勒が出現した場所は説話上では、「置於三花嶺上」であり、その出土した石弥勒を安置した場所が三花嶺であり後にここが生義寺(後に性義寺となる)とされたと語られている。しかし生義寺石弥勒は、慶州南山北側に位置する長倉谷において発見されたと報告されている。南は何らかの意味を付加するために記述された方角と考えられる。同様の記述が新羅赫居世誕生譚にみられる。

1) 「南望楊山下蘿井傍、異氣如電光垂地。有一馬跪拜之状。」
「遺事」²⁷⁾

2) 「望楊山麓。蘿井傍林間。有馬跪而嘶。即往觀之。」²⁸⁾「史記」
3) 「望楊山麓蘿井傍林間。有白馬跪拜状。即觀。」²⁹⁾「勝覽」

三つの書から、赫居世の出現の記述を比較してみると、1)の「遺事」のみ、「南」という記述と「異氣如電光垂地」という記述が加えられていることがわかる。「遺事」の編者・一然は、本書を編纂するに当たり、史書を元にしつつ奇瑞を記すために編纂したと述

べていることから、南は神聖なものが出現する方角と捉え表現を付け加えていたのではないだろうか。このことを実証するために、『遺事』における南の記述を総て取り上げ検証したところ、人名や地名に含まれる南の記述は取り上げ検証したところのみ、取り上げその方角が何を意味しているか見ていくと、全五六例中、凶兆のイメージを持つものは二例しかなく、吉兆としての奇瑞が現れる方角は八例、佛菩薩の出現など仏教にまつわる奇瑞を示す方角は二十三例であった。つまり、南は吉兆の奇瑞を示す方角と認識されていることから、「南洞」は神聖なる者が出現する方角「南」にある、始祖神が出現する山の土の中からの出現と言う意図で記されていたと捉えられる。

さらに、生義寺の弥勒がどのような形状であったかは、説話上では記されていないが、一九四〇年の『慶州南山の仏蹟』という朝鮮総督府の調査資料によると、丸みをおびた石仏として出土したという報告がなされている。この石仏は、現在慶州国立博物館に展示されているが、その形状は童子のようであると解説されている³²。説話上では、新羅の建国神の出現が語られる際に童子として出現するものが多い。例えば、新羅始祖赫居世王は「馬見人長嘶卵待童男。形儀端美。驚異之。」と伝えられており、また新羅第四代王・脱解王も「俄而開見。有端正男子。(中略)其童子曳杖率二奴。登吐含山

上作石塚。」などでみられる通り、いずれも童子として出現したと語られている。生義寺の石弥勒も童子像として造像され祀られていたということは、建国神のような神聖な存在として捉えられ信仰されていたと考えられる。

ここまで、「山の麓の洞穴から祖神が出現する」という三品氏の定義する神霊なるものの出現の型と本説話の「南山の南洞から出現する」という型の一致、また「南山」「南」という神聖な者の出現を示す記述、建国神と同じ童子像として造像され祀られていたという点から、生義寺の石弥勒が神聖なるものとして認識されていたのではないかということ考察した。個々のモチーフにおける意味を検証してきたが、これらのモチーフが一体どのような話の枠組みを利用し語られているのか説話の構成を見ていくこととする。

4 説話の枠組みについて

南山から出現する始祖神は赫居世である。『遺事』『三国史記』(以後『史記』と略す)、『新增東国輿地勝覽』(以後『勝覽』と略す)に伝えられている。『遺事』『史記』『勝覽』から共通事項を取り出し、さらに赫居世の神話の枠組みを指摘すると次の通りである。³³

I・奇瑞により出現場所の暗示(南山の南)

II・卵からの出現

Ⅲ・童子として出現

Ⅳ・宮を造り祀る

生義寺石弥勒の説話の枠組みを指摘すると次の通りである。

I'・夢に現れた僧によって出現場所の暗示（南山の南）

Ⅱ'・洞からの出現

Ⅲ'・（童子像の）石弥勒として出現

Ⅳ'・寺を造り安置

各番号における事項は対応していることから、赫居世における神話の枠組みと生義寺の石弥勒出現縁起譚の枠組みは緩やかに一致していることがわかる。つまり生義寺の石弥勒出現縁起譚は、始祖神の出現の型を用いながら、新羅の建国神である赫居世王の神話の枠組みを用いて弥勒の出現が語られているといえる。この説話は善徳王代（六三二―六四七年）のものであると記されており、仏教が法興王代の五二七年に公認され、しばらくしてから語られた説話であるという観点から考えると、生義寺弥勒説話は弥勒経典の記述や内容をもとに受容しているのではなく、神話の枠組みを用いて語られるという説話の重層的な受容構造が確認できるのである。また、この石弥勒が後にどのような信仰対象となっていたかと言いつつ記述が、卷第二紀異第二景德王忠談師表訓大徳にみられる。

僧曰忠談。曰。何所歸來。僧曰。僧每三重九重九之日。烹茶饗

南山三花嶺彌。勒世尊。今茲既獻而還矣。（中略）王曰。然則為朕作理安民歌。僧應時奉勅歌呈之。^⑧

三花嶺の弥勒世尊は兜率天往生を願うために信仰されていたのではなく、国家の安寧を祈願する対象として信仰されていた。それは、石弥勒が建国神に近いイメージで捉えられていたからであり、国を守る存在として考えられていたからであろう。

四 日韓弥勒説話比較

生義寺石弥勒の出現縁起譚から石弥勒が出現する意味を考察してきた。ここでは、『今昔』にみる弥勒造像・彫頭譚との比較を試みる。『今昔』卷第十一第十五・三十話の両説話は、卷十一という本朝仏法部に組み込まれ、さらに寺院建立の展開・繁栄を示す説話群に分類されている。また、『遺事』における生義寺石弥勒の条も卷第三興法第三という仏法の興りを述べた説話群の、次の塔像第四の寺院建立の縁起を示す説話群に分類されている。両説話とも、同義の説話群に分類されているが、そこに見られる弥勒の意味は大きく異なる。

『今昔』における弥勒説話に関する先行研究においては、信仰について言及されているものが主であるため、弥勒の記述がみられるが弥勒信仰の研究においては扱われてこなかった説話がある。石橋

氏は兜率天往生説話を彌勒信仰として取り上げ『今昔』の卷十三話以降の説話を取り上げ論及されている。また速水氏は、『今昔』における彌勒信仰説話は、『法華験記』以後記されたものがなく、『日本靈異記』と『法華験記』からの再引用が多い」とされ、さらに『法華』・『靈異』からの引用以外の記述として九例をあげておられるが、元興寺縁起説話は含まれていない。³⁵⁾ よって、著者は、『今昔』卷十一第十五話・三十話をとりあげ彌勒が天界にいる天人や童子に「彫られる・造られる」意味を小論にて考察したが、これは彌勒仏の造像を通じ、正統な仏法が到来することを語ろうとしたものであったことを指摘した。³⁶⁾

しかし、『遺事』における生義寺石彌勒の説話は、洞の土の中からの「出現」である。これは神霊の出現の型と類似しており、そして説話構造においては新羅始祖である赫居世の神話の枠組みが緩やかに基層に働いていた。つまり、『今昔』『遺事』における彌勒の出現にまつわる説話は、共に寺院建立という仏法の伝来を示す説話群にあるが、両者に於ける彌勒の意義は異なっている。生義寺石彌勒は、建国神や始祖神のような神聖な存在として認識され語られていることから、国の安寧を祈願する対象・つまり護国信仰の対象として捉えられている。しかし『今昔』の両話における彌勒は、正統な仏法の到来を示していることから、日本と韓国に於ける彌勒仏出現

における認識が異なることが指摘できるのである。

五 まとめ

著者は、小論において『今昔』における卷十一第十五・三十話の彌勒の出現の意味を解釈してきた。⁴⁰⁾ それは天界にいる天人・童子により「造られる・彫られる」のであり、正統な仏法の到来を彌勒を通じて語ろうとした説話であった。本論では、この『今昔』の彌勒の出現にみる意義に韓国の彌勒説話の影響が見られるかを検証するために、韓国の彌勒説話を取り上げ解釈し比較を行ったものである。

今回取り上げた、『遺事』生義寺石彌勒における現在に至るまでの研究では、仏教学が主張する經典の記述が元になった説話、つまり、彌勒が出現する転輪聖王の世界を新羅において具現化させようという彌勒下生信仰が元になった説話であるという見解や固有信仰のあらわれであるという二つの見解が指摘されてきた。しかし、三品氏が指摘する、仏像は「出現するもの」として、固有の神靈観に即して語られるのである」という視点に立ち、説話側からテキストにえがかれる彌勒について再考察を加えた。生義寺石彌勒の出現は、始祖神の出現という型を用いたものであり、説話の構成としては赫居世の神話の枠組みが緩やかに基層に働いた構造であることから、神的存在としての出現とみなすことができた。それゆえこの弥

勒は護国信仰の対象として捉えられていたといえよう。弥勒を神聖な存在として捉える概念は『今昔』に見られないことから、『今昔』と『遺事』というテキストの制約のある範囲での検討ではあるが、日本と韓国の弥勒出現にまつわる説話には直接的な影響関係は認められないといえる。なぜ、影響が認められないかについての論証は、他日の論へと譲ることとする。

注

- ① 石橋義秀「平安朝に於ける弥勒信仰」『国語と国文学』第四八号、一九七一年三月。
- ② 田村圓澄『古代朝鮮仏教と日本仏教』吉川弘文館、一九八〇年、二〇頁。
- ③ 『今昔』における弥勒信仰に関する代表的な先行研究は次の通りである。
石橋義秀、前掲論文①。速水侑「日本古代社会における弥勒信仰の展開」『南都仏教』第一六号、一九六五年。井上光貞『日本浄土教成立の研究』山川出版社、一九五六年。辻善之助『日本仏教史』岩波書店、一九四四年。他。
- ④ 日本と韓国の説話をどのように比較すべきかということを考えてきたが、テキストとテキストの比較をしてみると、著者が意図的に改変を加えた表現なども考慮しなければならず、客観的な比較が難しい。そこで、まず各説話から事項を取り出し、事項レベルで比較することによって、より客観的な比較が可能であると考える。この事項レベルでの比較の方法は、廣田收氏における昔話の比較方法論を取り入れたものである。

（廣田收「昔話の語型と語り・昔話「鳥吞爺」と唱え言をめぐって」『人文学』第一七九号、二〇〇六年三月。『講義日本物語文学小史』金壽堂出版、二〇〇九年、二九〇～三一四頁。）

- ⑤ 分類一覧は添付資料に付した。一覧表の表記方法は、『今昔』における弥勒説話は、話教番号を便宜上〇で表記した。『遺事』における弥勒説話は、個々に説話番号が付されていないため、編目名および説話名で表記した。出現の様相を中心にし分類したのは、弥勒仏にまつわる説話のほとんどが仏像の靈験ではなく、この世への現れ方を説いているからである。

⑥ 『今昔』における弥勒信仰についての代表的研究は、石橋義秀、前掲書①、速水侑「日本古代社会における弥勒信仰の展開」『南都仏教』第一六号、一九六五年。が上げられる。『遺事』においては、趙愛姫『新羅仏教研究』山喜房書林、一九七三年、二三七～二八一頁。などが主な論著である。

- ⑦ 池上洵一校注『新日本古典文学大系 今昔物語集三』岩波書店、一九九三年によると、出典は未詳であり、同文の同話として菅家本「諸寺縁起集」元興寺条、『南都七大寺巡礼記』、同話として醍醐寺本「諸寺縁起集」が指摘されている。類話比較一覧は、紙幅の関係上省略する。

⑧ 前掲書⑦によると、出典は未詳であり、類話として『伊呂波字類抄』、『阿婆縛抄』、護国寺本「諸寺縁起集」、『大日本仏教全書』などが指摘されている。類話比較一覧は、小論「今昔物語集」における「弥勒」と「天人」——卷十一第三十話を中心に——（『同志社国文学』第七三号、二〇一〇年十二月。）を参照のこと。

- ⑨ 類話・同話は指摘されていない。『三国史記』『東国輿地勝覧』『朝鮮総督府資料調査』『東京雜記』等を調査したが、発見するにいたらなかった。

- ⑩ 八百谷孝保「新羅社会と浄土教」『史潮』第七年第四号、一九三七年二月。
- ⑪ 金煥泰「新羅の彌勒思想——三国遺事を中心として——」『東国大学校論文集』第十四輯、一九七五年。その他にも同じ見解の論述は次のとおりである。
- 석이현「新羅時代弥勒思想の特徴」『釋林』一四号。徐閔吉「新羅の弥勒思想」『韓国仏教思想史』円光大学出版局、一九七五年。金杜珍「新羅中古時代の弥勒信仰」『韓国学論叢書』第九、一九八七年。において、巫覡信仰が関係していると指摘された。
- ⑫ 趙愛姫氏は、「下生信仰であると見做すわけは、石弥勒の出土という点である。すなわち、石弥勒の出土であっても、未来世への弥勒の出世のごとく、また前記の弥勒化現のごとく、まさに弥勒が出世したといえるからである。」とし、下生信仰の現れであるとされいている。(『新羅における弥勒信仰の研究』『新羅仏教研究』山喜房佛書林、一九七三年、二四三頁)。同様の見解として金壽永「韓国仏像研究」同朋舎、一九七八年、二六六頁。김남윤「新羅彌勒信仰의 전개와 성격」『歴史研究』第一—二号、歴史学研究所、一九九三年。などがあげられる。
- ⑬ 新羅固有の信仰の現れであるという見解に次の論者がある。
- 金杜珍「新羅中古時代の弥勒信仰」『韓国学論叢書』第九、国民大学校韓国学研究所、一九八七年。徐閔吉「한국의 불교사상」『국사』二〇〇六年、一〇六頁。
- ⑭ 三品彰英『神話と文化史』平凡社、一九七一年、一九三頁。
- ⑮ 弥勒仏に関する經典は、『大正新脩藏經』第十四卷に収録されている。主要なものには次の六点である。①仏説弥勒菩薩上生兜率天經。②仏説弥勒下生經。③仏説弥勒下生成仏經。④仏説弥勒下生成仏經。⑤仏説弥勒大成仏經。⑥仏説弥勒来時經の六つがあり、「弥勒六部經典」とされて
- いる。またそのうち、①③⑤を「弥勒三部經典」という。
- ⑯ 『大正大藏經』第十四卷、大正一切経刊行会、一九二四年。
- ⑰ 『遺事』卷第五感通第七月明師兜率歌。
- ⑱ 『遺事』卷第四義解第五心地經祖。
- ⑲ 三品彰英「古代朝鮮における王者出現の神話と儀礼について」(『史林』第二卷、一九三六年。)などがあり、末松保和「新羅史の諸問題」東洋文庫、一九五四年。において所論を集め見解を示されている。
- ⑳ 『三国史記』新羅本紀第一第四代脱解尼師今において「望楊山下狐公宅。以為吉地」という記述があり、脱解(第四代の王。在位五七—八〇年)が学問に専念し地理に精通し楊山の麓を見てそこに吉兆の地と考えそこに住んだとある。南山の別名とされる楊山の麓が吉兆の地であると考えられていたことが分かる。
- ㉑ 『遺事』卷第二紀異第一處容郎望海。
- ㉒ 「したがって、始祖赫居世の天降の地も其西北麓に之を傳へ、新羅の日神・天神を崇祀する神祠も此処に在ったのではないかと考へられ、古新羅から神聖靈嶽として崇敬されて居たことが想像出来る。」(慶州南山の仏蹟)朝鮮総督府、一九四〇年、三頁。
- ㉓ 『遺事』卷第三塔像第四 四仏山 掘仏山 万仏山。
- ㉔ 三品彰英『神話と文化史』平凡社、一九七一年、一九一頁。
- ㉕ 三品彰英『日本神話論』平凡社、一九七〇年、二二頁。
- ㉖ 金壽永「韓国仏像の研究」同朋舎、一九七八年、二三九頁。
- ㉗ 『遺事』卷第一紀異第一新羅始祖赫居世王。
- ㉘ 『史記』新羅本紀第一代 始祖赫居世居干。
- ㉙ 『勝覽』卷二十一 慶尚道 古跡。
- ㉚ 「必有以異於人者(中略)然則三国之始祖皆發乎神異。何足怪哉。此紀異之所以漸諸篇也。意在斯焉。」(『遺事』卷第一紀異第一)

- ③1 一覧表は、紙幅の関係上省略する。
- ③2 『바물관 들어다보기』 국립경주박물관, 二〇〇九年、一〇八頁。
- ③3 『遺事』 卷第一紀異第一新羅始祖赫居世王。
- ③4 『遺事』 卷第一紀異第一第四脱解。
- ③5 類話比較一覧は、紙幅の関係上省略する。
- ③6 『遺事』 卷第二紀異第一景德王忠談師表訓大徳。
- ③7 注③と同じ。
- ③8 九例とは、卷第十一第九話、十三話、二十五話、二十八話、二十九話、三十話、卷第十二第二四話、卷第十四第四話、卷第十五第十六話をさす。
- ③9 小論『今昔物語集』における「弥勒」と「天人」——卷第十一第三十話を中心に——、『同志社国文学』第七三号、二〇一〇年。『今昔物語集』卷第十一第十五話「聖武天皇、始造元興寺語」考——「弥勒」と「童子」の関わりを中心に——（『同志社国文学』第七四号、二〇一一年）。
- ④0 注③9と同じ。

*本稿は二〇一一年五月の説話・伝承学会春季大会（於…神戸大学）における口頭発表を基にしています。当日ご教示を賜りました先生方に、厚く御礼申し上げます。

(添付資料1)

| B : それ以外のもの | | A : 兜率天往生 | |
|---------------|--|---|--|
| ③その他 | ②弥勒出現 | ①石仏・弥勒仏として出現 | ②兜率天に生まれる(往生) を予告 |
| 三例 (卷十一⑨⑬⑳) | <p>夢告 一例 (卷十五⑮)</p> <p>罪の重さを知らせるため出現 一例 (卷十七㉓)</p> | <p>願いをかなえるため出現 一例 (卷十七㉔)</p> <p>四例 (卷十一⑮⑳、卷十二⑪㉑)</p> | <p>九例 (卷十二⑳、卷十三⑦⑪⑮、卷十四③④⑩、卷十五④⑥)</p> <p>四例 (卷十二㉒、卷十三②、卷十四⑱⑳)</p> |
| 卷第四義解第五賢瑜珈海華嚴 | <p>二例 (弥勒が童子として出現)</p> <ul style="list-style-type: none"> • 卷第三塔像第四弥勒仙花未戸郎真慈師 • 卷第五感通第七月明師 | <p>三例</p> <ul style="list-style-type: none"> • 卷第三塔像第四南白月二聖努勝夫得怛怛朴朴 • 卷第四義解第五閼東楓岳鉢淵敷石記 • 卷第五感通第七懺興遇聖 | <p>二例 (亡き人物の兜率天往生を願う)</p> <ul style="list-style-type: none"> • 卷第三塔像第四南月山、 • 卷第五感通第七月明兜率歌 <p>四例 (出現した弥勒にまつわるものも含む)</p> <ul style="list-style-type: none"> • 第二紀異第二孝昭王代竹旨郎 • (卷第二紀異第二景德王忠談師表訓大徳) • 卷第三塔像第四生義王石弥勒 • 卷第三塔像第四洛山二大聖観音正趣調信 |
| | | | 『今昔物語集』 |
| | | | 『三国遺事』 |